



新型コロナの夏が終わろうとしている。先日、菅義偉総理が誕生した。この原稿が掲載される頃、大学では後期授業が始まり、学生たちは一部、キャンパスに戻っているであろう。私は大学で主に学生の相談に乗っているが、この半年をふり返ると、ご多分に漏れず大学も異様な状況であった。

入学式や年度初めのガイダンスでさえ、大学構内で

新型コロナ禍の夏

れた。オンライン授業では、パソコンの画面に先生が映っているのだけれど、本当にこの人が大学に実在するのか不安になると言う学生もいた。

また、就活中の4年生は活動がオンラインになり、企業を訪れて会社の雰囲気を感じることも、担当者と会ってその人となりを感じることができない。ZOOMの面接では、どんな会社で自分が会社から何を求められているのか、全く見当がつかないと言う。その場のリアルな空気感、温度などが全く伝わってこず、彼らの不安をさらにあおっていた。

若者たちが多い。大人もみな自分のことで手いっぱい、誰もがコロナに罹りたくないから、必要なこと以外、できるだけ人と関わらないように、戦々恐々として生きている。コロナに罹った疑いがあるだけで、いわれのない中傷や疑いを受けて傷ついている学生もいる。いつもはあんなに優しくかった友の、自分を見る目の色が微妙に違うのだと言う。私は彼ら、彼女らに何ができるのであろうかと考える。

不信の種が静かに時(ま)かれています。トランプ大統領がもたらす「断絶」を連想する。平時にはゆるぎないものに思われた他者への優しい信頼は、実はとても恵まれた奇跡以外の何ものでもなかったのではないかと考える。

また、就活を控えた3年生は訪問型のインターシ

ップが減り、オンラインでは意味がないと、わざわざ業種を替えてまで訪問型インターシップを開催している企業を探していた。人にとつての肌触りのようなものの大切さ。子ども

の頃、抱きしめられた時の母親の肌の温かさや匂い、人の根源につながる安心の源が揺らいでいる。

特に感じるのが人とつながれないこと。心もとなさ、孤立感、根なし草感と、隣人へのうつすらとした、

しかし根深い不信感だ。大学生は大人と子どもの中間に位置する、青年期の

当たり前前の奇跡に気づかされる夏であった。襟を正して生きねばと思う。

※文中の学生の声は、多数の学生の声をまとめた創作であることをお断りします。

肌触り感と信頼からの隔絶

普通にできない。胸を躍らせて入学したのに、1度しかキャンパスに足を踏み入れていない1年生たち。大学で1人も友達ができない、これからどうやって大学生活を送ったらいいのかわからないと、1人でつぶれそうな胸の内を話してく



名古屋経済大学学生相談室専任カウンセラー
(公認心理師・臨床心理士)

野副 紫をん

のぞえ・しをん 臨床心理学。
中京大学大学院文学部研究科心理学専攻修士課程修了。

